

## 松島基地を訪ねて

6月23日、災害派遣状況を視察するため、かつて副司令として勤務していた松島基地訪問の機会を得ました。

西空災害派遣隊員の入替便を利用したの現地視察で、総飛行時間約5時間、現地滞在時間約70分、実質可動時間はわずか40分という強行軍でしたが、4空団装備部長の完璧な案内で基地内外をつぶさに見ることができました。

私が勤務していた当時の松島基地は、樹木の剪定は行き届き、芝生や草花もよく手入れされ、大変綺麗でした。また、海寄りの集落には多くの人々が住み、海と暮らす町らしく、道路脇の敷地には小さな船が何艘も並べてありました。

ところが、今回の震災で状況は一変。すべてが津波に呑み込まれ、松島基地も町も甚大な被害を受けました。

あれから3ヶ月。復旧作業が順調に進み、人の動きも落ち着いて、だいぶ平常に戻ったと聞き、今回訪問させていただきました。

基地内の庁舎地区は一見、津波被害にあったとは思えないほど綺麗に見えたのですが、よく見れば樹木は塩水被害で葉が赤茶け、芝や草花は、雑草が取って代わっていました。(聞けば、草刈り機もすべて塩水に浸かって使用できなくなったとのこと。)

それ以外の場所は、まだ、津波被害の傷跡も痛々しく、外周道路のアスファルトは多くが剥がされ、一部は道路自体が削り取られていました。また、えぐり取られた土手は、赤い肌をさらけ出していました。

連日の隊員達の努力で、復旧作業は順調に進んでいるようですが、往時の状態に戻すには、まだ相当の時間がかかるんだろうなと容易に想像がつく状況でした。

また、多くの人々が住んでいた海寄りの町は、瓦礫の山と化していました。

かろうじて道路は、車両が通行できる程度に片付けられてはいましたが、人の気配はもちろん、鳥や虫もない無機質の風景が広がっているだけでした。

隊員監視の下、瓦礫撤去が始まったばかりとはいえ、広い集落の中にポツリ、ポツリと2～3台の重機が稼働している光景を見るに、これから延々と作業が続くんだろうなとこれまた容易に想像のつく状態でした。

このように大変な状況の中にあっても、明るく、笑顔で迎えてくれた元部下の面々。そして、復興に向け、ひたむきに努力している派遣隊員の現状を見て、できる限りの応援をしなければと改めて心に誓った次第です。

(西空司令部 装備部長 1等空佐 金山 寛)



えぐり取られた土手



瓦礫の山と化した町